

江戸
が
八
生
一
十

わが人生観13 高村光太郎

1970年3月30日 初版発行

定価450円

著 者 高村 光太郎

発行者 大 和 岩 雄

発行所 ^{だい}わ 大 和 書 房

東京都文京区関口1の33

振 替 東 京 6 4 2 2 7

電 話 (203) 4511~4

郵 便 番 号 1 1 2

製版・印刷・信毎書籍印刷 製本・美成社

1395-040130-4406

<検印略>©1970

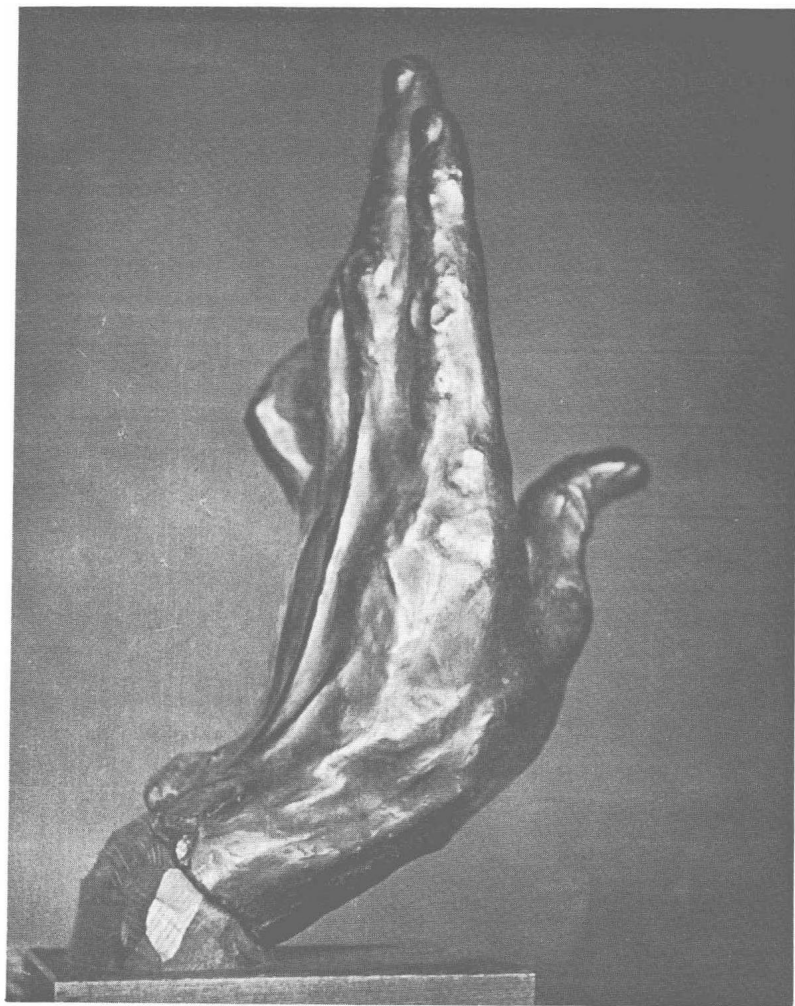
わが人生観¹³

高村光太郎

大和書房



昭和26年10月 安田勝彦氏撮影



大正7年頃 「手」 大竹新助氏撮影

目 次

愛について

——智恵子と私の出会い——

智恵子の半生

智恵子の切抜絵

新茶の幻想

九十九里浜の初夏

某月某日

人生について

趣味という事

女みづから考えよ

女の生きて行く道

岩石のような性格

日常の瑣事にいのちあれ

81 78 70 66 63 46 43 39 36 13

目 次

母性のふところ	84
若い人へ	88
玄米四合の問題	91
美しい生活	95
生命の創造	97
若き日の思い出	
わたしの青銅時代	107
青春の日	139
遍歴の日	152
美と真実の生活	
開 墾	171
みちのく便り	175
山の春	182

山の秋

189

美と真実の生活

201

詩について

詩について

221

生きた言葉

223

所感

229

解説

藤島宇内

231

——智恵子と社会観——

年譜

241

装幀 上口睦人

わが人生観
13
永遠の愛

愛について

そんなにもあなたはレモンを待つてゐた
かなしく白くあかるい死の床で

わたしの手からとつた一つのレモンを
あなたのきれいな歯ががりりと噛んだ
トバアズいろの香気が立つ

その数滴の天のものなるレモンの汁は
ばつとあなたの意識を正常にした

あなたの青く澄んだ眼がかすかに笑ふ
わたしの手を握るあなたの力の健康さよ
あなたの咽喉に嵐はあるが

かういふ命の瀬戸ぎはに

智恵子はもとの智恵子となり

生涯の愛を一瞬にかたむけた

それからひと時

昔山巔さんてんでしたやうな深呼吸を一つして

あなたの機関はそれなり止まつた

写真の前に挿した桜の花かげに

すずしく光るレモンを今日も置かう

へレモン哀歌

智恵子の半生

妻智恵子が南品川ゼームス坂病院の十五号室で精神分裂症患者として粟粒性肺結核ぞくりゅうで死んでから旬日で満二年になる。私はこの世で智恵子にめぐりあったため、彼女の純愛によって清浄にされ、以前の靡爛生活から救いだされることができた経歴をもっており、私の精神は一にかかって彼女の存在そのものの上にあったので、智恵子の死による精神的打撃は実に烈しく、一時は自己の芸術的製作さえその目標を失ったような空虚感にとりつかれた幾カ月かを過ごした。彼女の生前、私は自分の製作した彫刻を何びとよりもさきに彼女に見せた。一日の製作の終りにもそれを彼女といっしょに検討することがこの上もない喜びであった。また彼女はそれを全幅的に受け入れ、理解し、熱愛した。私の作った木彫小品を彼女は懐ふところに入れて街を歩いてまで愛撫した。彼女のいないこの世で誰が私の彫刻をどのようにに子供のようにうけ入れてくれるであらうか。もう見る人もいやしないという思いが私を幾カ月間悩ました。美に関する製作は公式の理念や、壮大

な民族意識というようなものだけではけっして生まれない。そういうものはあるいは製作の主題となり、あるいはその動機となることはあつても、その製作が心の底から生まれでて、生きた血をもつに至るには、かならずそこに大きな愛のやりとりがある。それは神の愛であることもあろう。大君おおぎみの愛であることもあろう。また実に一人の女性の底ぬけの純愛であることがあるのである。自分の作ったものを熱愛の眼をもつて見てくれる一人の人があるという意識ほど、美術家にとって力となるものはない。作りたいものをかならず作りあげる潜力となるものはない。製作の結果はあるいは万人のためのものともなることがある。けれども製作するものの心はその一人の人に見てもらいたいだけでいい。私はいかなるが常である。私はそういう人を妻の智恵子にもつていた。その智恵子が死んでしまった当座の空虚感はいさげよえほとんど無の世界に等しかった。作りたいものは山ほどあつても作る気になれなかった。見てくれる熱愛の眼がこの世にもう絶えてないことを知っているからである。そういう幾カ月苦闘の後、ある偶然の事から満月の夜に、智恵子はその個的存在を失うことによってかえって私にとっては普遍的存在となつたのであることを痛感し、それ以来智恵子の息吹きをつねに身近かに感ずることができ、いわば彼女は私とともにある者となり、私にとっての永遠なるものであるという実感のほうが強くなった。私はそうして平静と心の健康とを取り戻し、仕事の張合いがもう一度出てきた。一日の仕事が終わって製作を眺めるとき「どうだろう」といって後ろをふりむけば智恵子はきつとそこにいる。彼女はど

こにでもいるのである。

智恵子が結婚してから死ぬまでの二十四年間の生活は愛と生活苦と芸術への精進と矛盾と、そうして闘病との間断なき一連続にすぎなかった。彼女はそういう渦巻の中で、宿命的にもつていた精神上的の素質のために倒れ、歓喜と絶望と信賴と諦観とのあざなわれた波濤の間に没し去った。彼女の追憶について書くことを人から幾度か示唆されても今日までそれを書く気がしなかった。あまりなまなましい苦闘のあとは、たとい小さな一隅の生活にしても筆にするに忍びなかったし、またいわばたんなる私生活の報告のようなものにはたしてどういう意味がありうるかという疑問も強く心を牽制していたのである。だが今は書こう。できるだけ簡単にこの一人の女性の運命を書きとめておこう。大正昭和の年代に人知れずこういうことに悩み、こういうことに生き、こういうことに倒れた女性のあったことを書き記して、それをあわれな彼女への餞とすることを許させてもらおう。一人に極まれれば万人に通ずるということを通じて、今日のような時勢の下にもあえてこの筆を執ろうとするのである。

今しずかに振りかえって彼女の上を考えると、その一生を要約すれば、まず東北地方福島県二本松町の近在、漆原という所の酒造り長沼家に長女として明治十九年に生まれ、土地の高女を卒業してから東京目白の日本女子大学家政科に入学、寮生活をつづけているうちに洋画に興味をもち始め、女子大卒業後、郷里の父母の同意をかるうじて得て東京に留まり、太平洋絵画研